

江戸川乱歩「湖畔亭事件」の大衆性について

——谷崎潤一郎「白昼鬼語」との比較を通して——

宋 珩 炫

一、「真剣」と「情熱」の「二年間」の模索と転換

江戸川乱歩は大正一二年の作家デビューから昭和四〇年に没するまでの長い間に多くの作品を執筆した。しかし、「二銭銅貨」でデビューした大正一二年には、それ以外には随筆一編（四月）、「一枚の切符」（七月）、「恐ろしき錯誤」（十一月）のみ、三年には「二廢人」（六月）、「双生児」（一〇月）の二作品だけであり、作品の掲載誌も『新青年』だけで、デビューしてから二年間はまだ専業作家としての活発な動きは見られない。

しかし、大正一四年になると乱歩は専業作家となることを決心して、本格的な活動を始める。

大正十四年から翌々昭和二年の三月までの二カ年余りに、私は自分の持っている小説力ともいふべきものを殆んど出しつくしたのであった。（中略）大正十四年「新青年」の二月号から連続短篇をのせはじめ、翌十五年も辛うじて小説を書き

つづけたが、その年の終りから連載をはじめた東西の朝日新聞の「一寸法師」に自己嫌悪を感じ、それが終った昭和二年三月、筆を投じて無期休業を決意するまでの二年余り、今から考えると、これが私の作家としての最良の時期であった。虚名が拡がったり、収入が多くなったりしたのは、それより後のことだが、小説家として真剣に情熱を傾けたのはこの二年間であった¹⁾。

乱歩は大正一四年から昭和二年にわたる二年余りの時期を以上のように回想している。多数の短編と最初の長編連載、合作連載を発表するなど、「最良の時期」を迎えたのである。『新青年』の編集者であった森下雨村以外にも『写真報知』の野村胡堂、『苦楽』の川口松太郎と出会い、『新青年』以外の雑誌や新聞にも作品を載せ始め、春陽堂からは大正一四年七月に『心理試験』、大正一五年一月には『屋根裏の散歩者』、九月には『湖畔亭事件』が刊行された。そのうえ『大衆文学』の中心として活動していた二十一日会に加入し、機関紙『大衆文芸』の創刊に参与した。そ

れ以外にも探偵趣味の会に加入し、『探偵趣味』の創刊と編集に参与するなど、様々な活動を開始した。「自分の持っている小説力ともいべきものを殆んど出しつくした」、「作家としての最良の時期であった」、「小説家として真剣に情熱を傾けた」という乱歩の回想の通りである。

このような乱歩の活発な動きの背景には大正末期の〈大衆〉や〈大衆文学〉の登場があった。『新青年』のような探偵小説の色彩が強い雑誌から、『苦楽』や『サンデー毎日』のような大衆雑誌に作品を載せ始めたことは、〈大衆〉という新しい読者とともに〈大衆文学〉が登場する時代の動きと連動して、乱歩が作家としての転換期を迎えていた証拠である。

乱歩はこの時期に最初の長編連載作品である「湖畔亭事件」、「闇に蠢く」、「空気男」の三編を同時に連載するが、『苦楽』に「人間椅子」を寄せたことをきっかけにして編集者の川口松太郎から長編連載を注文され、大正一五年一月号から「闇に蠢く」と題して長編連載を開始することになった乱歩は、この作品について次のように述べている。

この小説で、私は何かエロティックなオドロドロしきものを書こうと考えていた。私の心の中のジャーナリストは、純探偵小説よりも、そういう怪奇濃艶の小説の方が歓迎されることを、これまでの二三の短篇の経験によって、十二分に意識していたのである。といっても、私の場合は、決してつけ焼刃ではなく、私の中には純探偵趣味と列んで、本来そういうものが多分にあった。それを小出しにして見たら大いに

歓迎されたので、いくらかいい気になったというわけであらう。

この「怪奇濃艶の小説」が読者に歓迎されたという回想は、乱歩が読者の存在について十分に意識していた証拠と考えられる。

「人間椅子」が読者投票で第一席になったことがきっかけで、長編連載の注文をうけたということもある。読者の感想や読者投票の非常に大きくなったということでもある。読者の感想や読者投票のような読者の反応や、読者欄の活性化によって、作家に読者という存在を意識させる状況が形成されており、この時期の乱歩が、大衆という読者や、その大衆のために作られた大衆雑誌を意識した結果が、「エロティックなオドロドロし」い「怪奇濃艶の小説」を指すことにつながっていったのである。

二、「湖畔亭事件」と「白昼鬼語」

すでに述べたように、大正一四、五年の二年間は、それまで本格ミステリー的な色彩が強かった乱歩の文学に変化が起った時期であり、大衆という新しい読者を意識して多くの作品が書かれた。その二年間に発表された作品の中でも「湖畔亭事件」は、前節の乱歩の回想の中の、彼が目指した「エロティックなオドロドロしきもの」、そして「怪奇濃艶」の代表作であり、そうした大衆志向性を象徴する（覗き）をトリックとして利用した、大衆志向への転換を象徴する注目すべき作品である。

一方、乱歩がもっとも意識した先行作家の一人である谷崎潤一

郎の作品中にもこの「湖畔亭事件」と同じく覗き趣向が採用されている。「白昼鬼語」（大正七年）という作品がある。二つの作品とも話者の「私」が「覗き」を通じて目撃した「殺人」が、実は本当の「殺人」ではなく、他の人物たちによる芝居であった、というような展開となっている。ただし、完全にそのように決着しているわけではなく、ある程度の疑問と謎を残しながら、ではあるが。

「湖畔亭事件」の主人公である「私」は「レンズ狂」という異常な性癖の持ち主であり、それが発展して「隙見」のための「携帯覗き眼鏡」を日ごろから愛用している。そしてそれを家族の勧めで滞在中であった温泉宿の浴場に応用し、自分の部屋から脱衣所が覗けるような仕掛けをつくり、異常な性癖を満足させていた。ある時、その「私の鏡の世界」のなかで、「一本の男のらしい手」に握られた短刀によって、「白い女の体が、背中から真っ赤なドロドロしたものを流す」「殺人」を目撃する。

一方「白昼鬼語」では、主人公の「私」が友人の園村に誘われ、殺人現場を目撃することになる。園村が活動写真館で拾った紙切れに暗号で殺人計画が記されていたというのである、男女の三角関係のもつれによる殺人の計画が。園村は解読された紙切れの内容を半ば以上信じており、「私」のほうは半信半疑だったが、一度目は現場を探すのに失敗したものの、さらに解読して、その時刻にその場所に駆けつけることが出来た。そして、下町の路地の奥の小さな家の兩戸の節穴から、二人は、男女がもう一人の男を「殺人」するの覗き見る。しかも加害者の二人は死体を写真にとり、それを薬液で溶かそうとする。

この二つの「殺人」は実は本当の「殺人」ではなく、他の人物たちによる芝居であった、というような展開に、両作品ともなっている。ただし、前述のように、完全にそのように決着しているわけではなく、ある程度の疑問と謎を残しながら、ではあるが。

こうした類似は、乱歩と谷崎の関係を考えれば、ありうることであり、不思議ではない。しかし、同工異曲という言葉もあるように、両作は似てもいるけれども、違ってもいる。そしてその点を突き詰めていくと、二人の、作家としての「同工異曲」ぶりにも気づかされる。その「同工異曲」ぶりを検討することで、この時期の乱歩文学の特徴を浮かび上がらせることができるのではないか。つまり、この時期の乱歩が目指した「エロティックなオドロドロしい」「怪奇濃艶の小説」ぶりを、同工異曲の「白昼鬼語」との比較によって明らかにできるのではないかと思うのである。

三、「湖畔亭事件」

大正一五年一月から五月まで『サンデー毎日』に連載された「湖畔亭事件」は、ある片山里の「湖畔亭」という温泉宿で起きた未解決事件の真相をめぐる話者の「私」の打ち明け話で、その冒頭は次のようである。

読者諸君は、先年H山中のA湖のほとりに起つた、世にも不思議な殺人事件を、御記憶ではないでしょうか。片山里の出来事ながら、それは、都の諸新聞にも報道せられた程、異

様な事件でありました。ある新聞は「A湖畔の怪事件」という様な見出しで、又ある新聞は「死体の紛失云々」という好適的な見出しで、相当大きくこの事件を書き立てました。

「A湖畔の怪事件」とか「死体の紛失云々」と報道された「A湖畔の怪事件」は、五年後の今日まで、遂に解決せられないのであります。犯人はもちろん、奇怪なことには、被害者さえも、実ははっきりとは分っていないのであります。「ところがここに、広い世界にたった二人だけ、あの事件の真相を知っている者があるのです。そして、その一人は、かくいう私自身なのであります」。こうして、五年経つても未解決のままであったものが、五年の沈黙を破つた「私」によつて事件の真相が再吟味されることになるストーリーなのである。

こうして話は前述のように「私」自身の異常な性癖や不思議な道楽から、「隙見」のための「携帯覗き眼鏡」の温泉宿の脱衣所への設置、「殺人」の目撃へと展開していく。最初、確かに目撃した「殺人」は形跡がなく「私の病的な錯覚」ではないかと思われたが、やがて血痕が発見され、近所の芸者の長吉が行方不明であることもわかつてくる。死体は発見されなかったが、「私」が見た「白い女の体」、即ち「殺人」の被害者は長吉ではないかということになり、「私」は洋画家の河野という男と共同で長吉殺人事件をめぐる謎解きに挑戦する。二人は、長吉が行方不明になる直前まで彼女と一緒だった「トランクの男たち」、つまり松永たちを最初の容疑者として名指す。

私の見た彼等の妙なそぶりといい、今の番頭の言葉といい、そして、長吉の行方不明、浴場の血痕、のみならず、鏡の影と彼等の出立との不思議な時間の一致。どうやらその間に聯結がありそうな気がするではありませんか。

「私」と河野は、「妙なそぶり」や「彼等の出立との不思議な時間の一致」のため、松永たちを犯人として疑うが、うまくいかず、最終的には犯人は風呂番の三造ではないかということになる。河野が「死体の処理に最も便利な地位に居ること、手の甲の煤跡、血のついた短刀、数々の贓品」などを証拠としてあげ、三造を有力な犯人として疑つたのであった。しかし、三造は逃げる途中に断崖から転落死し、湖畔亭事件は一応解決する。

ここまでが表面上の話で、それ以降では、「A湖畔の村人の噂話」や「Y町の警察署の記録」にも残っていない事実、つまり事件の「肝要な部分」が暴かれていく。事件が一段落した後、「私」と河野は同じ方向に向かう一組の列車に乗り、湖畔の町から離れる。ところがその車中で、河野の鞆から「何万円とも知れぬ莫大なお札の束」と「ガラス製の注射器」が転がり落ち、河野は途中下車した駅前の宿で、「私」に真相を告白する。それによれば、「私」が目撃したのは、河野と長吉が演じた芝居であり、「私」に「激情的な美しい光景」を見せると同時に、長吉を芸者の立場から解放するのが目的だった。注射器は血痕を残すための道具として使用し、お札の束（おそらく贗造紙幣）は森の中に松永が隠したものを三造が見つけ、横取りしたが、三造が事故死したため、今度河野が横取りしたものであったのである。

河野はこのことを「私」に打ち明け、長吉との再出発を見守ってくれるよう懇願する。「私」は同意し、二人は別れたが、その後河野からの手紙で、長吉の死亡と河野の海外への旅立ちを知り、果たして真相は河野の告白通りなのかと疑問に思うところで、話は終わる。

この作品の仕掛けとしては、やはり覗き装置、浴場、脱衣所、裸などが目につくが、冒頭の読者への呼びかけに見られるような、読者を意識した、読者サービスも大きな特徴である。さらにはミステリーとしても、犯人や犯行の経緯が二転三転するなど、娯楽性もたっぷり含まれた構造になっている。これらの特徴については、あとの節で、さらにまとめてみたい。

四、「白昼鬼語」

大正七年五月二三日から七月一日まで『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』に連載された「白昼鬼語」は、小説家である話者の「私」に、自ら精神病の遺伝があると称している園村からかかってきた電話から始まる。内容は、「今夜の夜半の一時ごろに、東京の或る町で或る犯罪が、……人殺しが演ぜられる」から「今から支度をして、君と一緒に其れを見に行かう」というものであった。精神病者の園村が「遂に発狂したのであらう」ととった「私」は、「狂人の見舞ひに行く」つもりで、「友人としての徳義を重んじて」園村を訪ねることにする。

実はひよつとして園村は「私」を殺そうとしているのではないか、いやそんなはずはない、やはり彼は発狂して、「或る幻想を

事実と信じて、己と一緒に其れを見に行く気になって居る」だけにちがいない、とか考えながら。そしてそれが発端になり、「殺人事件」に巻き込まれることになる。

園村の説では犯罪の場所は向島のはずだった。園村がそう推測するのは、一昨日の晩、浅草の活動写真館で拾った紙切れに、暗号で殺人計画が記されていたからであった。園村の前の席に座った三人の男女のうちの一人の男を、残りの二人が殺そうという計画を、二人が人に分からないように手の平に書く指文字で相談していたというのである。その計画の時間と場所が、女が男に手渡した紙切れに暗号で記されていたのである。園村がそれを知ったのは、男がその紙切れを園村の前に捨てて行き、園村がそれを拾って解読したからだだった。

それによれば日時は今日の深夜、場所は向島で、うろこ形の目印のついた家で、というのだった。園村は解読された紙切れの内容を半ば以上信じており、「私」のほうは半信半疑だったが、結局夜の六時から八時くらいまで探しても目印は見つからず、二人は帰宅する。「僕がいかに神経衰弱にか、つて居たつて」間違はずがないと園村は言い、「私」はなぜ「未だに妄想を捨て、しまはないの」かと思ひながら。

こうして一度目は現場を探すのに失敗したものの、園村は再考し、さらに解読して、深夜に今度は水天宮の近所に「私」を誘います。今度は見事に目印を見つけ、その時刻にその場所に駆けつけることが出来た。そして、下町の路地の奥の小さな家の兩戸の節穴から、二人は男女がもう一人の男を「殺人」するのを覗き見る。節穴から最初に見えたのは、「真白な柱のやう」な女のうな

じで、つづいて、写真の機械、大きな金盥、そして女の膝の上の太った男の死体が、見えてくる。

何よりも二人が注目したのは、女の「妖艶な風情」でありその美しさであった。しかし二人の行為は残忍極まるもので、加害者の二人は首を絞めて殺した男の死体を写真にとり、それを金盥で薬液に溶かしてしまったのである。

「サロメ」のような女の美しさや恐ろしさとその残酷な行為に二人は驚くが、園村は女の犯罪が常習的であると推測しつつ、「病的な美しさ」をもつ「非常な美人」である女（櫻子）と「近附きになりたい」と言い出す。一週間後、園村は「恐るべき殺人鬼」であると同時に「美しい魔女」である女とすでに知り合いになつており、さらにその一ヶ月後には、共犯の角刈りの男も書生として住み込んでいるが、「私」はそれに危険を感じ園村に忠告する。しかし、園村は「私」の忠告を聞かず、二人は絶交する。数か月たった九月上旬、「私」のもとに園村の「遺書」が届く。自分が殺害されるシーンをあの時のように覗きに来いというものだった。そして「私」は「何処までも彼の唯一の友人としての義務を尽し」、彼の望み通りの行動をとる。ところが二日後、園村の死体写真が届き、その裏には、園村の遺言として、金子を園村宅まで受け取りに来るように、とあった。

しかし、殺されたと思われたと園村は生きて「私」を迎え、「私」は園村に「擔がれた」ことを知るのである。しかも櫻子は単なる「物好きな不良少女」で、園村と「私」が目撃した「殺人」も園村を「擔」ぐためであり、でも、園村は、「櫻子さへ承知してくれ、ば、僕はいつでも本当に死んで見せる」と「私」に言い、そ

の「願望」や「何か彼に独得な異常な、性欲の衝動」を「私」が感じて、話は終わる。

この話の特徴として、確かに覗きの趣向はあるものの、より強調されているのは、女の「妖艶な風情」でありその美しさであり、また女が「病的な美しさ」をもつ「非常な美人」であることである。それは園村に「櫻子さへ承知してくれ、ば、僕はいつでも本当に死んで見せる」と言わせるほどのものであった。

またもう一つの特徴として、何が本当で何が嘘か、はたして彼や自分は精神病者か狂人か、また、見たのは妄想か幻覚か真実か、といったシリアスな問いが、繰り返されていることである。そもそも題の「鬼語」は「綺語」でもあり、真実に背く、巧みに美化する、などの意味であり、そこからして真実が疑われているのである。

伊藤整は『谷崎潤一郎全集』の、同作品が収められた巻での解説で、この巻の所収作は「悪という問題を、さまざまな角度から研究し、論じ、描いて」いるとしており、「抽象的な問題」、「抽象的な思索」が、日常性・具体性から切り離されたところで追求されていると述べている。

読者の目には、本巻にまとめられたこれ等の作品は、そのほとんど全部が、小説としての形式や構成においては、色々な欠点があり、そのために作品としては、同期に書かれた「母を恋ふる記」や「或る少年の怏れ」に較べて不完全なものに見えるだろう。常に作品の芸術的な仕上げに留意し、またそういう点についての技術的な自信を失うことのない筈のこの

作家としては意外なほど、これ等の作品は具体性に欠けたような形を持っている。

その理由は、多分作者の特殊な態度によるものだろう。即ち形式は不完全であろうとも、そんなことに構っていられない。とにかく自分が考えた抽象的な問題の核心が明確に捕捉されるように、急所を生かさねばならない。そのためには、作品を小説らしいものにして、具体性を多く与えると、これ等の抽象的な思索はおぼろになり、曖昧になって実体を失う危険がある。問題をはっきりさせるためには、かえって作為的な筋や構成を利用して、具体的な印象が呼び起こすところの日常性から中心の問題を切り離すべきだ。多分そういう作者の配慮が、これ等一連の作品に行きわたっているのであらう。

ここで指摘されているように、この巻の所収作は（抽象的な問題・思索）が、日常性・具体性から切り離されたところで追求されていて、「白昼鬼語」もそうしたシリアスな側面を持っている。

五、視きをめぐる

〈視き〉は、二つの作品とも話者の「私」が意図せず「殺人事件」に巻き込まれるきっかけになるが、その違いははっきりしている。「白昼鬼語」では〈視き〉はそれほど重要ではない。⁵ 大事なのは、女性美の追求であり、それに惑わされている男の姿で、〈視き〉はそれを極大化するだけである。最初に見えたのは前述

のように、「真白な柱のような」女のうなじで、節穴と女の位置があまりに近いので、香水の匂いや髪の毛の一本一本も手に取るようであった。

（前略）其の撫で肩のなよなよとした優しい曲線と云ひ、首人形の首のやうにはつそりと衣紋から抜けて、居る襟足と云ひ、耳朶の裏側から生え際を縫うて背中へ続いて行くなまめかしい筋肉と云ひ、単に後姿だけでも、彼女が驚くべき艶治な嬌態を備へた婦人である事は、推量するに難くなかつた。こんな意外な場所で、こんな美しい女の姿に会つた。だけで、此の節穴を覗いた事は徒勞でなかつたと私は思つた。

このような「私」の〈視き〉は、園村の誘いによるものであつたが、「節穴を覗いた事は徒勞でなかつた」と思うくらいその美しさに惑つている。園村の場合も、「櫻子さへ承知してくれ、ば、僕はいつでも本当に死んで見せる」というくらいに、いつそう深くその女性美に感動している。

これに対して、「湖畔亭事件」の〈視き〉は、「白昼鬼語」とはちがつて、いろいろな仕掛けが大衆迎合的である。⁶ 「隙見」のため「携帯視き眼鏡」の考案もそうだが、「私」がそれで見るのは、「その隙見をする対象が、お話するのもはずかしいような変てこな、いまわしい物はかり」、「多くはここにいうをはばかる種類の事柄」、「もつと露骨な様々の光景」のものであり、女性の肉体や性的な事柄に集中している。

それにふさわしく、作品の中心となる事件でも、「隙見」のた

めの「携帯覗き眼鏡」を、温泉宿の脱衣所に設置して、その光景を部屋から見られるようにしている。そこで見たのは、「周囲に誰もいない時の、鏡の前の裸女」、「十人に近い宿の女中達の入浴姿」、「東京の富裕階級に属するらしい、女づれの一家族の一人で、十八位に見える、非常にけばけばしい身なりをした娘」の「西洋人の様に豊かな肉体」、「桜の花弁の様に微妙な肌の色」などであった。

もともと作中の〈覗き〉という行為は、本の読者や映画の観客が、その好奇心ゆえに〈覗き〉を行う人物に一体化するもので、読者を引き込む効果が強い。しかもその対象が前述のような性的なものであると、大衆迎合性はいっそう強まる。

このような面は、「白昼鬼語」の〈覗き〉には見られなかったものであり、それ以前の乱歩作品と比べても、ずっと大衆迎合的だと言える。〈覗き〉を利用した乱歩の有名な作品と言えば、直前では「屋根裏の散歩者」（大正一四年）、後では「押絵と旅する男」（昭和四年）があるが、どちらも、性的な要素はそれほどないし、大衆迎合的でもない。両作品とも、『新青年』のための本格ミステリーであり、乱歩が書き分けていたことが考えられる。

大衆化路線への転換で「エロティックなオドロドロしい」「怪奇濃艶の小説」を目指した結果、『新青年』向けの「屋根裏の散歩者」や「押絵と旅する男」とも違い、また尊敬する谷崎の「白昼鬼語」とも違う、「湖畔亭事件」のような大衆志向的な〈覗き〉が描かれることになったのである。

六、狂気や夢現をめぐる

「白昼鬼語」には女体美の賛美という、いかにも谷崎文学的な特徴もあるが、前述したように伊藤整の言う〈抽象的な問題・思索〉が日常性・具体性から切り離されたところで追求されている、という側面もある。それが精神病・狂気・発狂・狂人というテーマであり、もう一つが、何が本当で何が嘘か、見たのは妄想か幻覚か真実か、といったシリアスなテーマなのである。

「精神病の遺伝があると自ら称して居る園村が」という書き出しで、「白昼鬼語」は始まる。六月という「精神病の患者が最も多く発生すると云ふ今の季節——此の鬱陶しい、六月の青葉の蒸し蒸しした陽気が、きつと彼の脳髓に異状を起させたのに相違ない」と信じてしまった「私」は、あの暗号話を聞くうちに「いよ／＼彼の精神状態を疑ひ出」すが、いっぽうでは、「殺人」を見せてやると誘い出して「私」を殺そうとしているのではないかとも思う。しかし、「こんな下らない空想に悩まされるやうでは、事に依ると己ももう、気が違つて居るのではなからうか」とも思い始める。

このように狂気と正気の境界のあいまいさが、「白昼鬼語」のテーマの一つとなっており、これはこの作品の最後まで続く問題である。園村はどこまで正気なのか狂気なのか、そんな彼をどこまで信頼できるか。しかし、この問題は、園村だけに該当することではない。「私」は「私」自身の精神状態についても以下のよ

うに憂慮している。

狂人の見舞ひに行く。それは園村の唯一の友人たる私の義務だと云ひながら、実際あまりいゝ気持ちのものではなかつた。第一、私にしたつて彼を見舞ひに行く資格があるほど、それほど精神の健全な人間ではない。私も彼の親友たるに背かず、毎年此の頃の新緑の時候になると、可なり手ひどい神経衰弱に罹るのが例である。さうして今年も、既に幾分か罹つて居るらしい徴候さへ見えて居る。此の上狂人の見舞ひになんぞ出かけて行つたら、いつ何時、病気が此方へ乗り移つてミイラ取りがミイラにならぬとも限らない。

つまり、園村の唯一の友人である「私」にも同じく正気と狂気の問題があてはまる。作品の後半、「唯一の友人としての義務」から園村の遺書通り、園村が殺害される現場をこの前のように覗きに行くなどということが、正気の人に出来るだろうか。

また、この狂気・正気の問題と密接に関係するのが、何が妄想で、何が幻覚で、何が真実か、というテーマである。狂人が見るのが妄想で、正気の人が見るのが真実なのか。逆もあるのではないか。また、最後の園村による種明かしは、ほんとうにすべて「擔がれた」だけだったのか。最初の「殺人」は真実だったのではないか。あるいはその前の松村子爵事件はどうだったのか。

こうして、狂気・正気問題と、妄想・真実問題は密接に関係して、「白昼鬼語」の中心的テーマとなつていのである。伊藤整の言う〈抽象的な問題・思索〉だが、伊藤整は「白昼鬼語」について、「新聞小説として読まれるような面白さを十分に持つてい

るだけに、思索的な問題がほかされた趣がある」と言っている。⁸⁾〈覗き〉の大衆迎合性にやや流されたということか。

この反対が、「湖畔亭事件」である。ここには、大衆迎合的な面だけでなく、「白昼鬼語」のような〈抽象的な問題・思索〉も見ることが出来る。「レンズ狂」を述べた部分にある「甘美な夢の世界」と「いまわしい現実界」の対比であり、「悪夢」や「別世界」といった言葉もある。

すると、いつの間にか又、私は先ほどの幻について考えふけていました。あれが幻であつたと極めてしまうのは、とりも直さず、私の頭が狂っていることを承認する様なもので、余りに恐しいことです。それに、段々冷静に考えれば考えるほど、私の頭が、或る眼が、それほど狂つていようとは思われません。「ひよつとしたら誰かのいたずらではないかしら」愚にも、私はそんなことまで想像して見るのでした。

しかも、この引用のように、目撃したはずの「殺人」が芝居であつたかもしれないという展開には、「白昼鬼語」と同じ、何が妄想で、何が幻覚で、何が真実か、というテーマがあるとも言える。また主人公に関して繰り返される「レンズ狂」、「不思議な道楽」、「異常な性癖」、「いまわしい病癖」といった言葉は、正気・狂気問題ともつながっている。しかし、結局、「湖畔亭事件」の中心はそこへは行かない。あくまでも「エロティックなオドロオドロシ」い「怪奇濃艶の小説」が中心であり、大衆志向的な〈覗き〉で大衆の支持を得ようとしているのである。

七、「湖畔亭事件」の大眾志向性について

前節までで「湖畔亭事件」の大眾志向性については、かなり指摘してきた。興味深い覗きの仕掛け、誰もが興味を引かれる浴場や脱衣所という設定、などである。

それ以外にも、「湖畔亭事件」には大眾志向性を感じさせる個所がたくさんある。たとえば読者への語りかけがその一例で、作品の冒頭からそれは登場する。「読者諸君は先年日山中のA湖のほとりに起った、世にも不思議な殺人事件を、御記憶ではないでしょうか」。また、「注意深い読者諸君は御承知かも」とか「読者諸君は私をお責めになるかも知れません」などと読者に親近感を感じさせる語りかけがいくつもある。「まず私の打明け話しを、終わりまで御聞き取り下さい」などというのも同種である。

おまけのような脱線話も読者サービスのひとつである。「さて本題に入るに先だって、私は一応、私自身の世の常ならぬ性癖について、又私自身「レンズ狂」と呼んでいる所の、一つの道楽について、お話して置かねばなりません」と語り、「隙見」のための「携帯覗き眼鏡」を考案するまでと、それを旅館、茶屋、料理屋から女中の部屋などで実験し、「秘密観察」という「覗き眼鏡」の成功体験について紹介しているところがそれである。実際の話が始まってからは、見えたのは白い女の背中だけであり、エロティックな女体の描写は、このおまけ部分にあつたのである。このおまけ部分がないと、大衆迎合的な読者サービスはかなり少なくなる。

ミステリーとしての面白さも、大事な大衆志向性の一部である。「白昼鬼語」の場合は、最後に園村から種明かしされて、それまでの女たちによる「殺人」や園村殺しは芝居であると思われるが、「湖畔亭事件」の場合ももっと複雑で、もっと大衆迎合的である。列車の中で、実はあの「殺人」は園村と長吉による芝居であつたと告白されるが、それまでの部分では、転落死した風呂番の三造が犯人であり、長吉の死体は焼却されていたことになっていて。ところがさらにさかのぼると、最初は、「殺人」があつた夜にあつてて出発した松永が怪しまれ、持っていたトランクに切断された長吉の死体を詰め込んだのではないかという、仮説もあつた。ほかに、宿屋の主人、長吉を好きだつた「山持ちの息子」の松村、さらには共同捜査者の河野など、犯人候補がたくさんいた。その推理を楽しむなかで三造が犯人ということになり、さらにそれが列車の中でひっくりかえされ、そして河野と別れて五年たった今、「私」はもう一度河野を疑い始めているという複雑さである。ミステリーとしても小説「湖畔亭事件」は、十分な大衆志向性を持っているのである。

八、まとめ

これまで述べてきたように、日本社会全般の大衆化と作家としての大衆化に向けての転換とが絶妙にかみ合うことによつて、乱歩は「真剣」と「情熱」の二年間と呼べる時期を迎えるに至る。大衆という膨大な読者を前にした出版界の変化は、乱歩にとつても看過できないものであり、そこから乱歩は大衆に受け入れられ

やすい「エロティックなオドロオドロしい」怪奇濃艶の小説」を指すことになる。実際、『新青年』で発表してきた本格ミステリー系の作品から、大衆雑誌などで作品の発表領域を広げ、通俗ミステリーへの転換を図ったのである。ここではその代表例として、『サンデー毎日』に連載された「湖畔亭事件」の大衆志向性を「白昼鬼語」と比較し、様々な角度から見てきた。

特に乱歩が敬愛した谷崎の作で、「覗き」という「同工異曲」性をもつ「白昼鬼語」と比較することで、それを試みた。その結果、「覗き」という大衆志向性をもち、伊藤整も新聞小説なので「ほかされた」と言っているものの、正気・狂気問題と、それとつながる、何が妄想で、何が幻覚で、何が真実か、というシリアスな問題に取り組んだ「白昼鬼語」の特徴が明らかになった。

一方、この「白昼鬼語」と比較することで、「白昼鬼語」的な夢と現実というテーマが「湖畔亭事件」にもあることがわかったが、それは部分的で、全体的な傾向ではなかった。「湖畔亭事件」の全体的な傾向は、やはり読者サービスであり、ミステリーの面白さであり、そして最大のものは、「覗き」を使った読者の性的興味や関心への迎合だった。

このような「湖畔亭事件」の特徴をみると、乱歩はこの作品によって、大衆小説路線への転換に自信を持ったのではないかと思われる。このあと、昭和四年からは乱歩の第二期＝通俗ミステリーの時代が本格的に始まる。そこに向けての準備として、この「真剣」と「情熱」の「二年間」があったのである。またその代表作としての「湖畔亭事件」の価値も、再評価されるべきなのである。

注

- (1) 江戸川乱歩「専業作家となる【大正十四年度】」『探偵小説四十年(上)』光文社、二〇〇六年一月
- (2) 江戸川乱歩「三つの連載長篇」同前
- (3) 伊藤整「谷崎潤一郎全集」解説『谷崎潤一郎の文学』中央公論、一九七〇年七月
- (4) 注(3)に同じ
- (5) 「白昼鬼語」について中島河太郎は、「谷崎潤一郎の犯罪小説(続)」(『宝石』昭和三十八年二月、宝石社)において「谷崎のこの種の作品のなかで、もっとも探偵小説風の一つであった。暗号解説にはじまって、殺人現場の窃視、溶解による死体処理、さらに最後に明かされる意外な真相といい、探偵小説的な構成をとっている」と指摘するが、ここで重要なことはその〈探偵的な構成〉より、〈女性美〉や伊藤整が指摘する〈抽象的問題〉のほうである。
- (6) 中島河太郎は、『江戸川乱歩全集 第一巻』の「解説」(昭和三〇年六月、春陽堂)において「覗き」の興味という心理の弱点を的確に掴んだ上に、殺人と組み合わせられたことがその成功を決定的にしているものであつて、急転直下の謎の解決も、著者の不安をよそに、好評を得たのであつた」と述べ、「覗き」という仕掛けを通して「湖畔亭事件」が好評を得たことを指摘する。
- (7) 「白昼鬼語」の中の本当や嘘という問題について石割透は「谷崎潤一郎「白昼鬼語」―「嘘」と「実」のアラバスク」『日本文学』46巻6号、一九九七年六月)において、「深夜」

の悪夢というような殺人に「白昼」の日常世界に取り込まれ、時間の中で「嘘」と「実」の境界の喪失、逆転、融合を指摘する。

(8) 注(3)に同じ

(9) 乱歩文学の第二期＝通俗ミステリーの時代について藤井淑禎は『大乱歩展 神奈川近代文学館開館25年記念』(二〇〇九年一〇月、県立神奈川近代文学館)において以下のように指摘する。

〔略〕一九二三(大正二二)にはデビュー作「二銭銅貨」を「新青年」に発表した。以後、「D坂の殺人事件」、「屋根裏の散歩者」、「人間椅子」などの傑作ミステリーを立て続けに発表し、ミステリー作家として不動の地位を築いた。

一九二九年(昭和四)、初めて講談社の雑誌に通俗ミステリー「蜘蛛男」を連載し、大衆読者の喝采を博した。同種の作品に「黄金仮面」、「吸血鬼」、「人間豹」などがあり、いずれも関東大震災後の都市生活のモダン化と大衆社会状況と背景として、トリックや謎解きの面白さだけにとどまらない大衆小説としての興行きを示した。

一九三六年には初めて少年ものに取り組み、以後、この少年探偵団シリーズは、戦争をまたいで戦後に再開されると、戦後の児童文化興隆ムードにも後押しされて爆発的な人気を呼び、一九六二年まで書き継がれ、乱歩文学の代名詞ともなった。

このように乱歩ミステリーは、大きく見れば、三つの時期、三種のミステリーに分類できるが、そのいずれにおいても、

作家自身の内的理由と時代の要請との交点上にそれらの作品は誕生しており、そこに乱歩独特のバランス感覚を見ることができる。

附記

作品の引用は『江戸川乱歩全集第2巻 パノラマ島綺譚』(二〇〇四年八月、光文社)、『谷崎潤一郎全集 第五巻』(一九八一年九月、中央公論)に拠った。

(ソン ウヒョン 大学院後期課程在學生)